立山町文化財調査報告書第７冊

# 立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群
# 発掘調査概要

1988年３月

立山町教育委員会

# 序

立山町は名所・史跡が多く、古来より自然と文化を愛し、守って来た町です。しかし、近年多くなってきた開発行為により、この自然と文化はそこなわれつつあります。また、開発と遺跡保護との調和も、年々難しいものとなってきています。

このたび調査の行われた上末地区周辺は、古くは奈良・平安時代に須恵器を製作した上末古窯跡群があり、現在も越中瀬戸焼で知られる「焼物の里」であります。

調査はゴルフ場の造成に伴い行ったものですが、立山グリーンランド株式会社には、調査費用を全面負担していただくなど、調査に対して深いご理解とご援助をいただきました。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1988年3月

立山町教育委員会

教育長　坂井　市郎

# 例　言

1．本書は、立山カントリークラブ増設工事に先立つ、埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2．調査は、立山グリーンランド株式会社の委託を受けて、立山町教育委員会が行った。

3．調査期間・面積は以下の通りである。

試掘調査：昭和62年５月７日～６月８日までの延22日間、発掘面積約900㎡

本 調 査：昭和62年６月15日～10月５日までの延50日間、発掘面積約1000㎡

調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から、御理解・御協力を得た。記して謝意を表します。

4．調査事務局は、立山町教育委員会におき、社会教育課主事森秀典が事務を担当し、社会教育課長松井哲男が総括した。

5．調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典、北川美佐子（臨時調査員）。

6．地形測量は、小田木治太郎・沢辺利明・田島富慈美・春日真実・安英樹・田中道子（富山大学人文学部考古学研究室学生）の協力を得て行った。

7．調査から報告書の作成に至るまで、富山大学教授秋山進午・同助教授宇野隆夫・富山県埋蔵文化財センター職員の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。

8．本書の作成・資料整理においては、小田木治太郎・田島富慈美の協力を受けた。

9．本書の編集・執筆は、森・富山県埋蔵文化財センターの職員の助言・協力を得て、北川が行った。遺物写真撮影は、森が行った。

# 目　次

Ⅰ　位置と周辺の遺跡……1
Ⅱ　調査に至る経緯……1
Ⅲ　調査の概要……4
1．A地区……4
(1)立地と調査方法……4
(2)遺構……5
(3)遺物……5
2．B地区……8
(1)立地と調査方法……8
(2)遺構……8
(3)遺物……8
3．C地区……11
(1)立地と調査方法……11
(2)遺構……11
(3)遺物……12
4．D地区……12
5．E地区……12
(1)立地と調査方法……12
(2)遺構……12
(3)遺物……13
Ⅳ　まとめ……15
引用文献
写真図版

# 挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　地形と区割図……3
第３図　A地区遺構全体図……4
第４図　A地区炭焼窯―01・穴―02実測図……6
第５図　A地区炭焼窯―02実測図……7
第６図　B地区遺構測量図
第７図　B地区塚２号断面図
第８図　B地区塚１号断面図・墳頂部石組み実測図……9
第９図　C地区遺構全体図……10
第10図　C地区遺構実測図……11
第11図　E地区炭焼窯実測図……13
第12図　遺物実測・拓影図……14

# Ⅰ　位置と周辺の遺跡（第１図）

当遺跡群は、立山町の南方、上段段丘南端基部の丘陵上に位置する。

立山町の平野部は、主に常願寺川の扇状地形から成る。その東側には、旧常願寺川扇状地が隆起してできた河岸段丘が広く分布している。上段段丘は、吉峰段丘などと共に高位段丘面を形成しているもので、南北約6.5km、東西１～３kmの細長い台地となっている。東側には白岩川、西側には栃津川が流れ、下位の下段段丘面との比高差は、約５～20mを測る。上段段丘の地質は、新第三紀層の呉羽山礫層を、第四紀の加積層群が不整合に覆っている。加積層群の内、上段段丘面を広く覆うのは、隆起扇状地堆積物である上段塁層である。他に、段丘南端の上末・瀬戸地区では、瀬戸公園礫層、陶土として利用される瀬戸砂泥互層が見られる〔三鍋　1977〕。

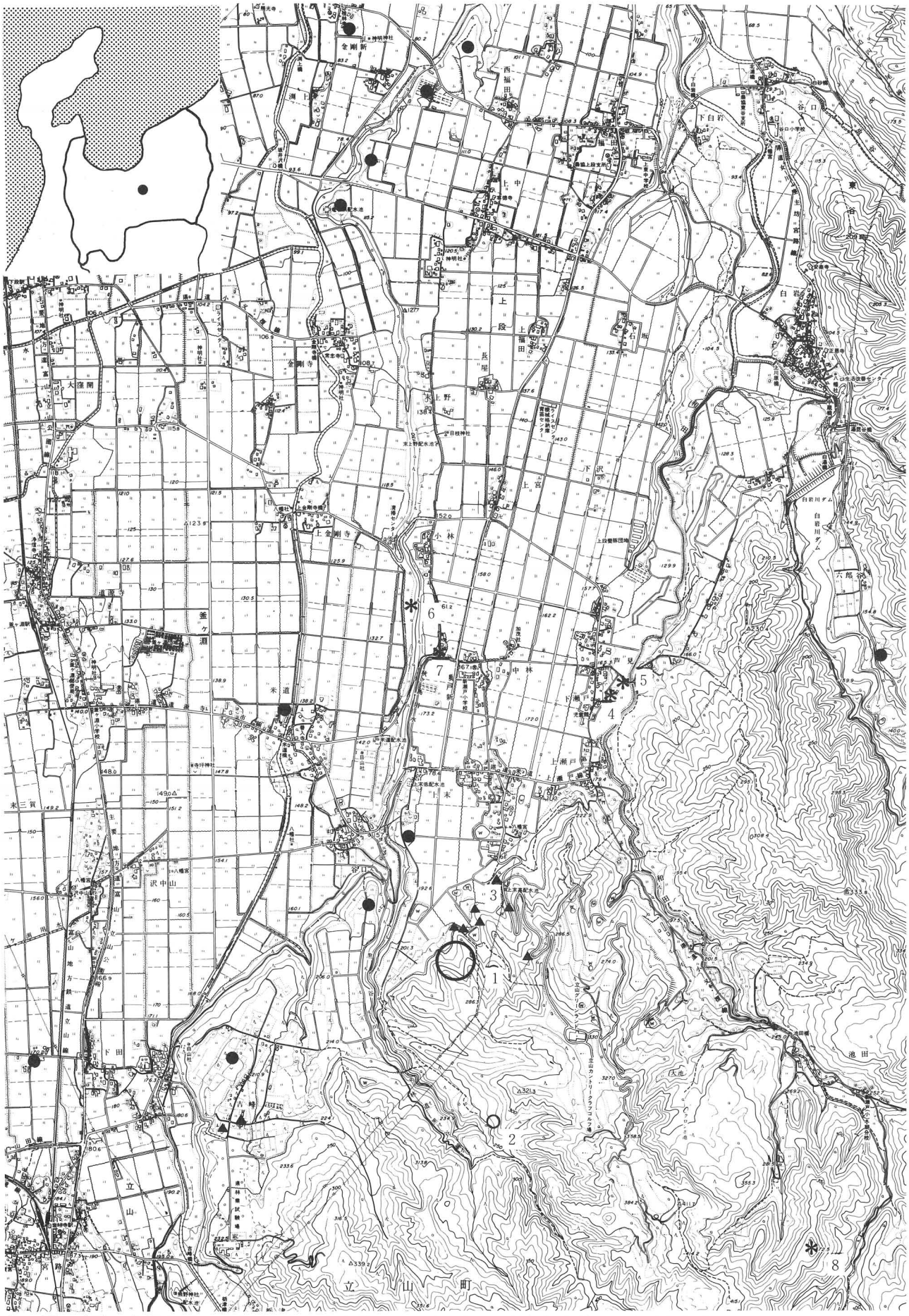
段丘上には、縄文時代の遺跡をはじめ、多くの遺跡が分布している。1985年には当地区の分布調査が行われ、詳細な報告が成されており、現在まで30箇所の遺跡の所在が判明している〔立山町　1986〕。縄文時代の遺跡は、多くが段丘縁辺部に立地している。先端部の日中源平衛腰遺跡では縄文時代早期末～前期初頭を主体とする遺物・土師器が出土している。西縁部の野沢狐幅遺跡では縄文時代中期中葉の住居跡６棟が検出された。東縁部の白岩薮ノ上遺跡では先土器時代の遺物、縄文時代中期初頭の住居跡、遺物などが出土している。又、上段段丘の南の吉峰段丘上には、吉峰遺跡が所在し、縄文時代早～晩期に至る資料が検出された。古墳時代になると、北端部の藤塚古墳が知られる。直径約20m、高さ3.8mの円墳で、内部に竪穴式石室をもち、彷製方格規矩鏡が出土している。奈良・平安時代には、段丘南端の丘陵裾において、付近の良質の陶土を利用して須恵器窯跡群が形成された。法光寺谷・釜谷周辺から、現在までに７基の窯跡が確認され、８世紀末から11世紀頃までの間製産されていたと考えられている。中世になり立山信仰が盛んになると、先端部の日中から米道にかけて立山参道が通じ、参道脇には日中経塚などがあり、日中玉橋経塚からは、大永５年（1525）在銘の銅製円筒型経筒が出土している。城跡には、池田集落の西方、城山上に池田城・日中集落の東に日中土塁がある。池田城は、戦国末期の永禄十年代、守護代神保長職の家宰であった寺嶋職定により築城されたものとなっている〔佐伯　1977〕。日中土塁は、佐々成政が天正11年（1583）に弓庄城を攻める時に築いた付け城に属するものである〔岸本　1979〕。その後、越中の支配が前田家に移り、前田利家の家臣前田五郎兵衛安勝が、尾張の陶工小二郎を呼び寄せて始まったのが、越中瀬戸焼である〔定塚　1974〕。上末から瀬戸・芦見一帯にかけて多くの窯が築窯され、その内甚兵衛窯は、現在も窯跡が残っている。

# Ⅱ　調査に至る経緯

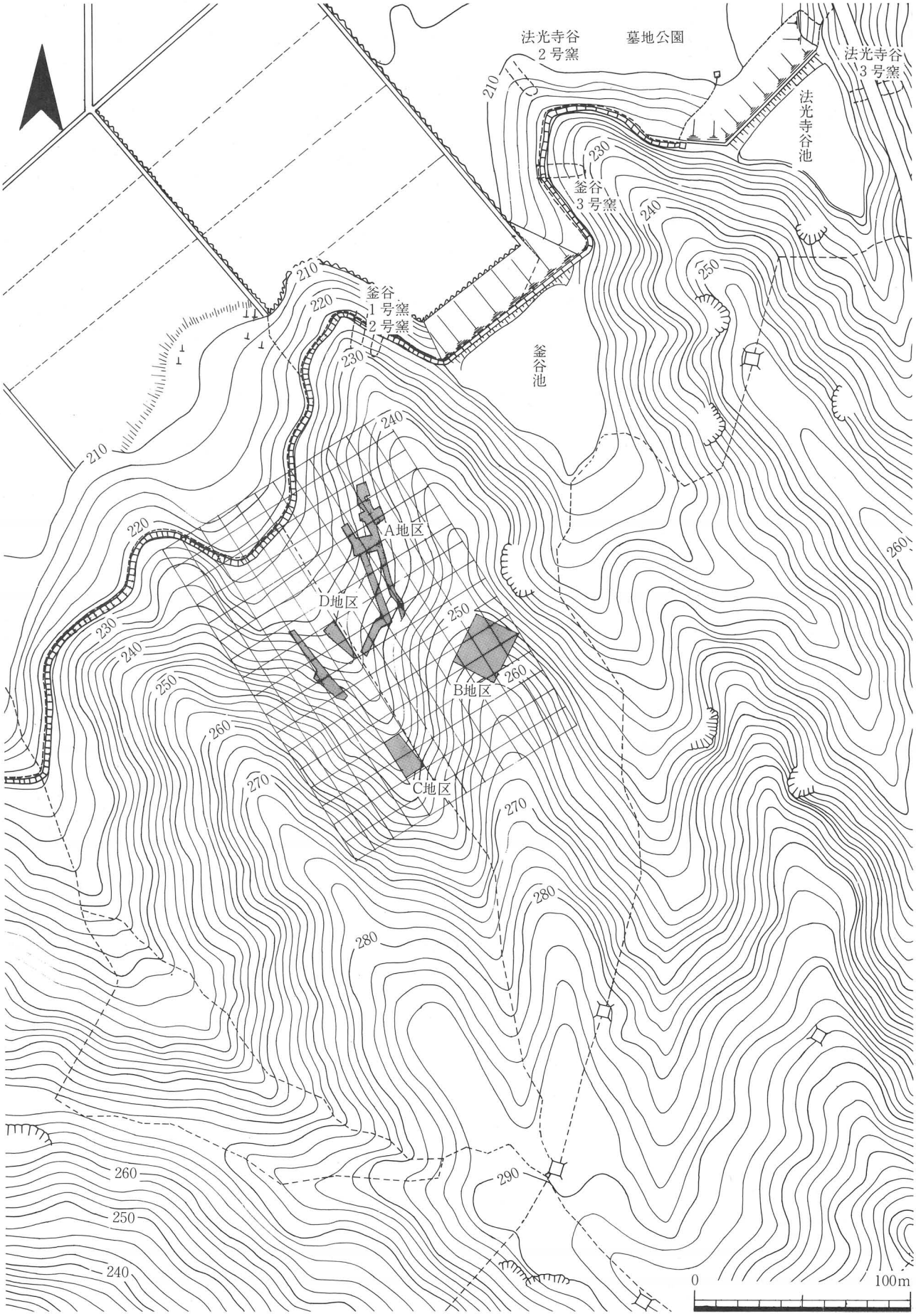
立山町の南東の上段段丘基部の丘陵周辺は、良質の粘土を産し、平安時代の須恵器、近世の越中瀬戸焼と、古くから窯業生産のさかんな地域であった。当地丘陵上に、立山カントリークラブが開設されたのは、昭和50年である。

昭和62年２月、立山グリーンランド株式会社より、立山町上末・谷口・米沢地内の同丘陵上にゴルフ場増設の計画が申請された。県文化課・立山町・当事者との協議の結果、近隣に埋蔵文化財包蔵地（上末古窯跡群）が存在することから、開発に先立ち、当事者負担において、埋蔵文化財等の有無の調査及び保護に必要な措置をとることとなった。調査については、当事者と立山町が委託契約を締結して行うこととなった。

同年４月、富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、工事計画地内の分布調査を行った結果、塚２基・古墳群・炭焼窯などが確認された。そのため、当事者と遺跡の取り扱いについて協議が行われ、５月より試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、昭和62年５月７日～６月８日の間、重機の搬入・調査区の伐採・尾根裾の須恵器窯の有無及び、塚・古墓群の内容確認を行った。本調査は、試掘調査終了後、６月15日～10月５日まで実施した。調査面積は約1000㎡である。調査対象地域は、遺構別にA～E 区の５地区に分けて行った。




**第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡**　1.当遺跡群　2.同E地区　3.上末窯跡群　4.甚兵衛窯跡
(S＝1：25,000)　5.伝孫市窯跡　6.新瀬戸古窯跡　7.釈迦堂経塚　8.池田城跡


法光寺谷
2号窯
墓地公園
法光寺谷
3号窯
法光寺谷池
釜谷
3号窯
釜谷
1号窯
2号窯
釜谷池
A地区
D地区
B地区
C地区
210
220
230
240
250
260
270
280
290
0
100m

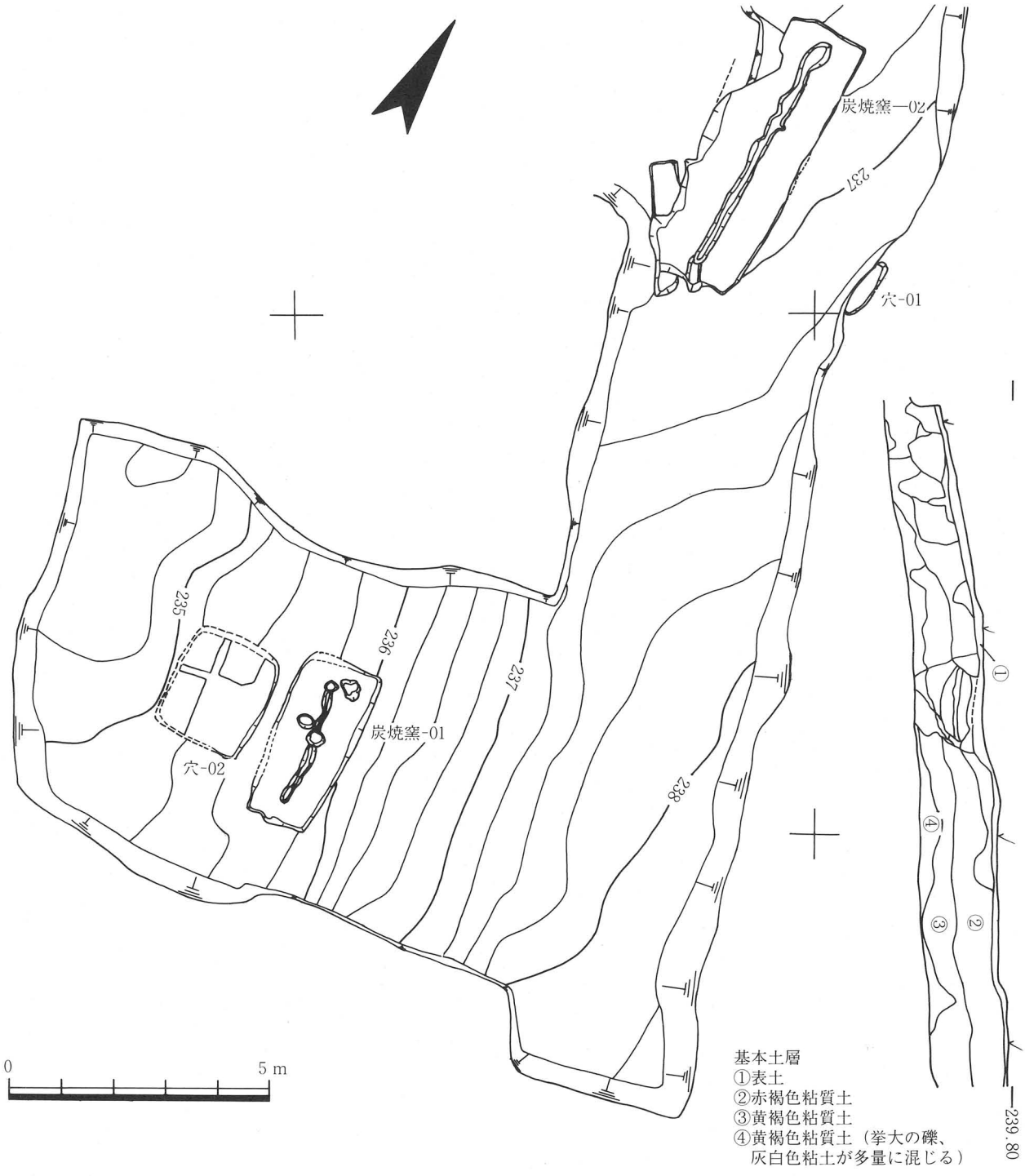
**第2図　地形と区割図**

# Ⅲ　調査の概要

## 1．A地区

**(1)立地と調査方法**（第２図）

Ａ地区は、釜谷池の西側、北西方向に向かってのびる舌状尾根の西側裾部に位置する。この尾根の先端東側には釜谷１・２号窯、池の東側には釜谷３号窯と釜谷窯跡群が形成されている。当尾根西側の谷には擁壁が造られる予定となっており、この谷を挟む尾根裾部においても、須恵器窯跡の存在が推測されたので、確認調査を行うことになった。




**第３図　A地区遺構全体図**

試掘調査において、谷の東西南斜面に幅約２m、深さ80～140cmのトレンチを計４本設定した。掘削は重機によって行った。各斜面の基本土層は、南斜面が黄色土・黒褐色土・暗茶褐色土・黄色粘質土（礫混入）、西斜面が黄褐色土・黒色粘質土・黄色粘質土（礫混入）、東斜面が暗茶褐色土・赤褐色粘質土・黄褐色粘質土（礫混入）となっている。須恵器窯跡は確認されなかったが、東斜面のトレンチの北端から、暗茶褐色土排土時に長方形の覆土に炭化物を含む遺構が確認された。本調査では、炭焼窯２基、穴２が検出された。

**(2)遺構**（第３～５図）

**炭焼窯―01**　A地区西側、標高236m付近、やや急な斜面に平行して位置する。平面形は長軸約3.5m、短軸約1.6mの長方形を呈する。窯の主軸方向は、N-４°-Wである。壁高は、東側が約56cm、西側約18cm、北・東壁が高く、南・西壁が低い。又、北・東・南壁は赤褐色粘質土を掘り窪めた締った壁面をなすのに、西壁は暗茶褐色土の壁で、やや立ち上がりがあまい。窯は、急斜面を利用して、高所を削って平坦面を造って構築されたものと考えられる。覆土は、黄褐色粘質土・暗黄褐色土・炭化物を多量に含んだ黄褐色土・炭化物層が、長軸面で、レンズ状に堆積している。東西断面では、黄褐色粘質土と暗黄褐色土の西への流れ込みが観察される。床面は平坦で、中央主軸上に長さ約2.3m、幅約12～22cm、深さ約３cmの浅い溝が走る。床面はほぼ全体に赤く焼けているが、中央の溝周辺が特に強く熱を受けている。赤化は東壁の一部にも見られた。他に、床面に４つの穴が検出されたが、攪乱穴と考えられる。

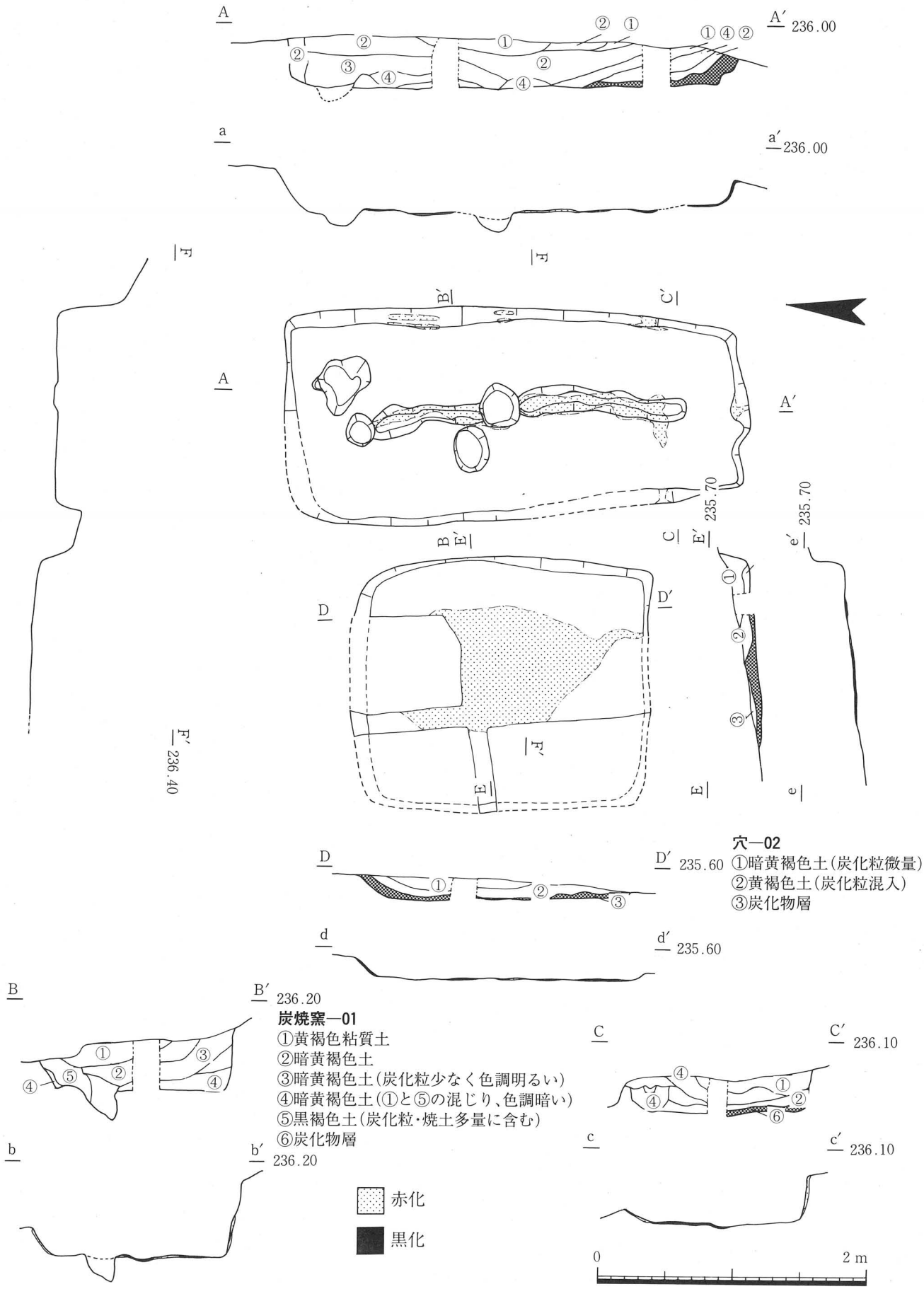
**穴―02**　炭焼窯―01の西側に平行して検出された。推定形は、一辺約1.9mのほぼ正方形をなすと考えられる。壁高は約11～24cm。床面はほぼ平坦面をなし、中央がやや広範囲に赤く焼けている。覆土は、暗黄褐色土・黄褐色土・炭化物層がレンズ状に堆積し、炭化物層の厚さは約５cmを測る。炭焼窯―01に平行して隣接しているため、付属施設としての作業場とも考えられる。その他の施設・遺物は、周囲からは検出されなかった。

**炭焼窯―02**　炭焼窯―01の北、標高237m付近、北西に向かう緩斜面に位置する。平面形は長軸約5.4m、短軸約２mの長方形を呈する。窯の主軸方向な、N-２°-Wである。壁高は、東壁が約30～47cm、西壁が約21～31cm、共に北に向かって低くなる。北壁高は約17cmで、立ち上がりが不明瞭である。東壁は内彎ぎみに立ち上がり、ほぼ全面にわたり赤く焼けている。顕著な所では厚さ約４cmの赤化が見られる。概して、下部に比べ上部が良く焼けている。西壁には赤化が見られず、炭化物による黒色化が見られるにとどまる。覆土は、黄褐色粘質土・暗黄褐色粘質土・炭化物や焼土を多量に含む黒黄灰色土・炭化物層の順に堆積している。炭化物層は厚い所では約27cmに達し、その中には、長さ約30cm、径約５cmの炭材が床面に水平に堆積していた。床面は北に向かって僅かに傾斜しているが、ほぼ平坦面をなす。床面中央には、炭焼窯―01と同じように、長さ約５m、幅約20～40cm、深さ２～５cmの溝が走る。床面はこの溝を中心に赤く焼けている。窯北西の覆土中から、越中瀬戸焼の破片が検出されている。

類似形態の炭焼窯と考えられている遺構の県内の類例は、福光町神明原Ａ遺跡（２基）〔岡上　1977〕、立山町白岩薮ノ上遺跡（３基）〔奥村　1981〕、八尾町長山遺跡〔神保　1987〕などがある。神明原Ａ遺跡の２基は、長方形に三つ葉をつけた形をしており、１基には床面中央に溝状遺構が見られる。白岩薮ノ上遺跡の１基は、１対の小ピットと対辺に煙道の痕跡と考えられる浅い窪みをもち、床面中央には浅い溝が走る。これらの遺構については、伴出遺物がなく、年代については不明となっている。当遺跡の窯からは、越中瀬戸焼が伴出しているため、年代は近世以降であろう。

**(3)遺物**（第12図１～３）

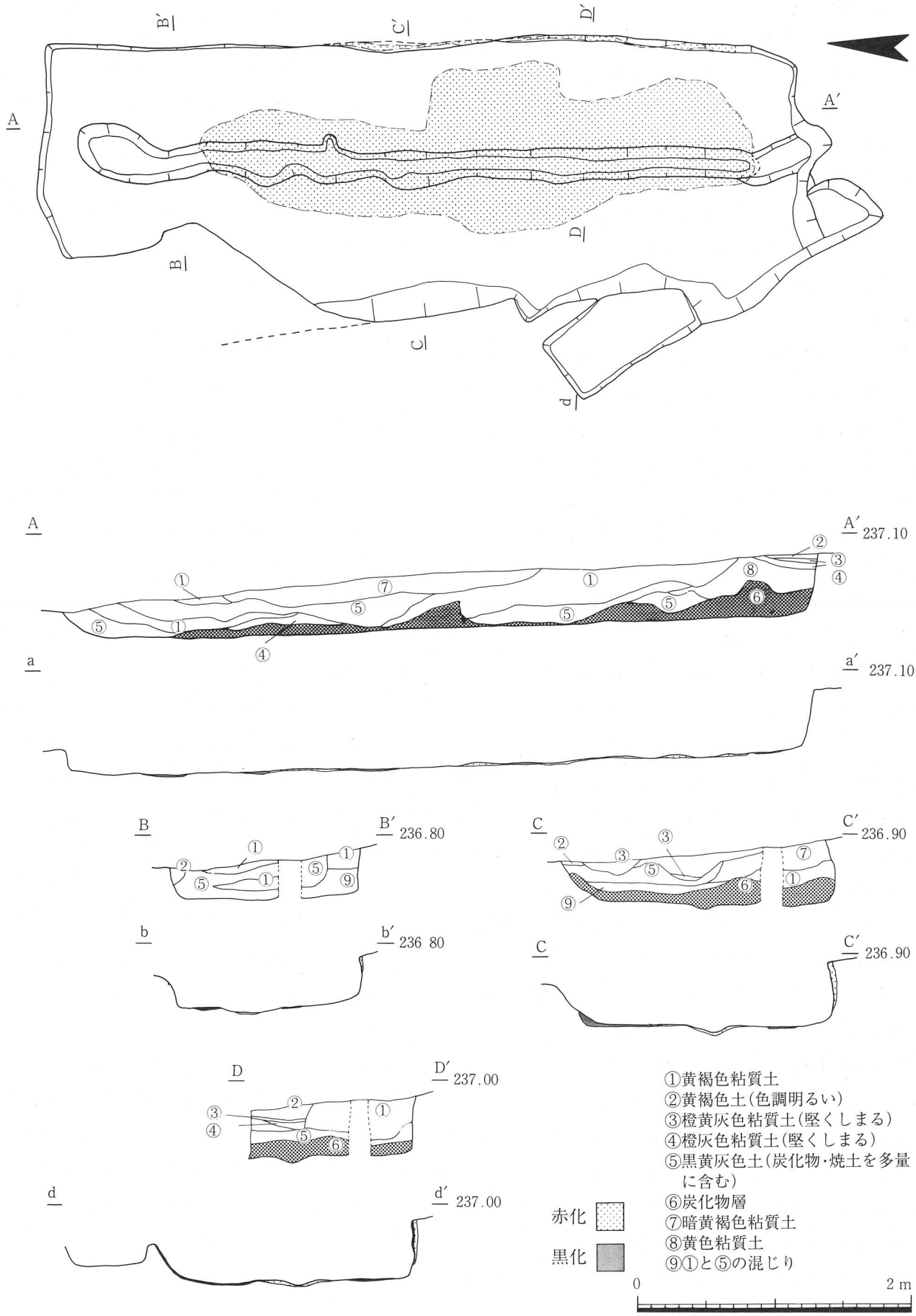
炭焼窯―02の覆土の黄褐色土層中より、越中瀬戸焼の破片が出土した。復原の結果、擂鉢３個体分が確認された。全てに内外面に鉄釉が施され、内面にはオロシメが見込みから上へかき上げられる。２はオロシメが左回りに施されている。オロシメの本数は３個体共11本である。１は口径27.8cm、２は口径25.6cm、口縁端部内面を強くナデ、内面に稜をもつ。３は口径24.0cm、体部は海老茶色を呈する。口縁端部内面をナデてできた稜は、上方へナデ上げられた形をしている。時期は17世紀以降であろう。




**穴—02**
①暗黄褐色土(炭化粒微量)
②黄褐色土(炭化粒混入)
③炭化物層

**炭焼窯—01**
①黄褐色粘質土
②暗黄褐色土
③暗黄褐色土(炭化粒少なく色調明るい)
④暗黄褐色土(①と⑤の混じり、色調暗い)
⑤黒褐色土(炭化粒・焼土多量に含む)
⑥炭化物層

**第4図　A地区炭焼窯—01・穴—02実測図**




**第5図　A地区炭焼窯—02実測図**

## 2．B地区

**(1)立地と調査方法**（第２図）

B地区は、A地区東の尾根上、標高約255～260mを測る所に位置する。東側眼下には釜谷池を見下ろす。ここに、分布調査で塚が２基確認された。塚は、細い尾根が急激に一段低くなった、やや広めの尾根上に築かれている。B地区南側急斜面を背に、北に向かい台状の平坦面が張り出す。その平坦面は、「冂」形状の溝状遺構により区切られ、東側平坦面北端の舌状に張り出した円形の高まりを塚１号、西側の平坦面を塚２号とした。

試掘調査では、塚２号上に任意の基準点を設け、主軸をN-23°-Eにとり、基準杭を18本設定し、平板測量を行った。等高線は25cm間隔で行った。測量終了後に、基準杭に沿い幅１mのトレンチを14箇所設定し、表土排土を行い、遺構外形がほぼ現状のままであることを確認した。本調査では、塚全面の表土排土を行った後、土層観察用のトレンチを設定し、盛土状況、内部構造の確認を行った。

**(2)遺構**（第６～８図）

**塚１号**　墳形は円丘形を呈し、南北約5.4m、東西約5.2mの広がりをもつ。塚北・東側は崖となっており、削平を受けている可能性もある。墳頂部の標高は256.855mを測る。頂部表面には５個の自然石が組み寄せられている。南西部裾には、北東方向から「U」字状に平坦面が陥入する。南北土層面を観察すると、北側では中心から約1.6m、南側では約1.4mの範囲で、濃黄褐色土・橙黄褐色土・淡黄褐色土・橙黄褐色土（礫を含む）・橙黄白色粘質土の盛土状の堆積が見られた。南西部裾の平坦面にあたる約1.2mの範囲には「U」字状に黄褐色砂質土が堆積していた。東西土層面西側においても、約2.6mの範囲まで同様の盛土状の堆積が見られた。東側では、薄い黄白色粘質土の帯が中心から約1.8mの範囲まで見られるが、上層は、黄褐色土・橙黄褐色土・淡黄褐色土がほぼ水平に堆積する。埋納施設・及び遺物は何ら検出されなかった。

**塚２号**　平面形は長方形プランを呈し、上面平坦部長軸約12m・短軸約９m、裾部は長軸約17m・短軸約11m・主軸はN-51°-Wをとる。上面は緩かに北西方向に向けて傾斜し、南西部ではそのまま斜面へと続く。塚裾、東側・北側南西端には溝状遺構が見られる。最狭部の北側での底面幅は約50cmである。南北土層面を見ると、南端部では赤褐色粘質土・赤褐色粘質土（礫混入）が堆積し、平坦面下層においては、主に黄褐色土・濃黄褐色砂礫土・黄褐色砂礫土・淡黄褐色砂礫土が堆積している。東西土層面では、塚西側斜面に土層の荒れが認められるものの、斜面断面が「L」字形を呈していることが窺われる。東側斜面底面では、約２mの範囲で他では見られない橙灰色粘土と砂層の互層が堆積する。基本土層は、主に黄褐色土・濃黄褐色土・赤褐色粘質土が霜降り状に混じる黄褐色砂礫土・淡黄褐色砂礫土・赤褐色粘質土が構成するが、その堆積状況は、トレンチにより異なり、複雑な様相を呈する。

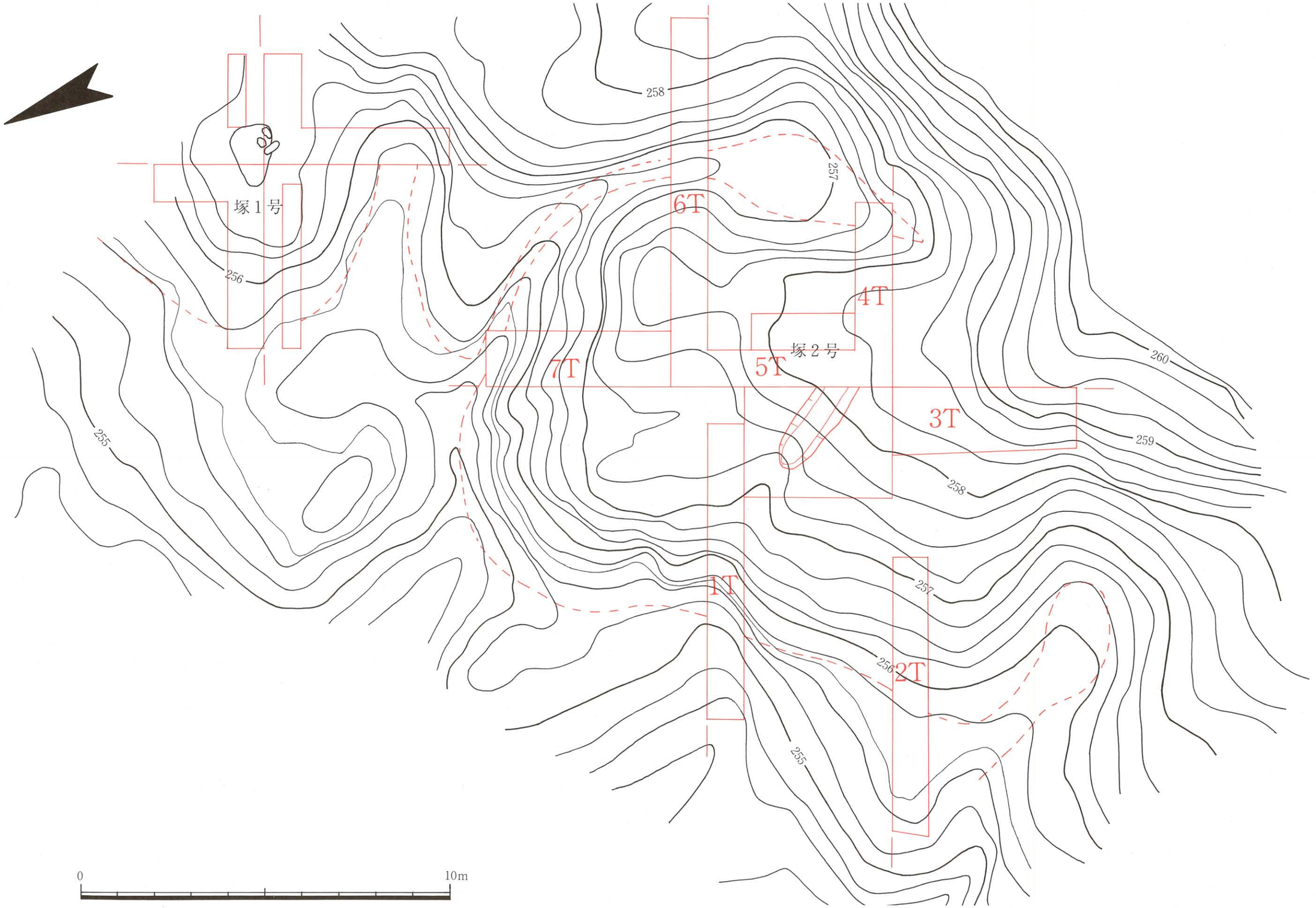
内部構造としては、５T排土時に断面に「V」字状の落ち込みが認められた。断面西側で確認を行ったところ、残存長約2.8m、幅１mの溝状の遺構が検出された。覆土の黄褐色砂礫土からは遺物は検出されなかった。他の遺構は確認されず、遺物は表土及び、トレンチ排土時に須恵器、越中瀬戸焼の小破片が出土したにとどまる。

**(3)遺物**（第12図４・５・９・13・15～17）

15～17は須恵器。15は壺の口縁部小破片。16は高台が付く杯。口径11.2cm、高さ4.4cmを測る。体部内面ロクロナデ調整、外面には自然釉がかかる。底部外面はヘラ切り。17は甕体部片。外面は擬格子状叩き目、内面は放射状叩き目。

４・５・９は内外面鉄釉を施した越中瀬戸焼の擂鉢。４・５は口縁部外面に段をもち、その端部は外方につまみ出した形状になっている。４のオロシメの本数は８本以上、５は５本以上。９の底部外面は糸切り。内面には10本のオロシメを左回りに施し、重ね焼きの跡が見られる。13は越中瀬戸焼の鉢の小破片で、ロクロ痕を目瞭に残す。内外面に薄く鉄釉がかけられ、外面赤茶褐色、内面黄褐色を呈する。

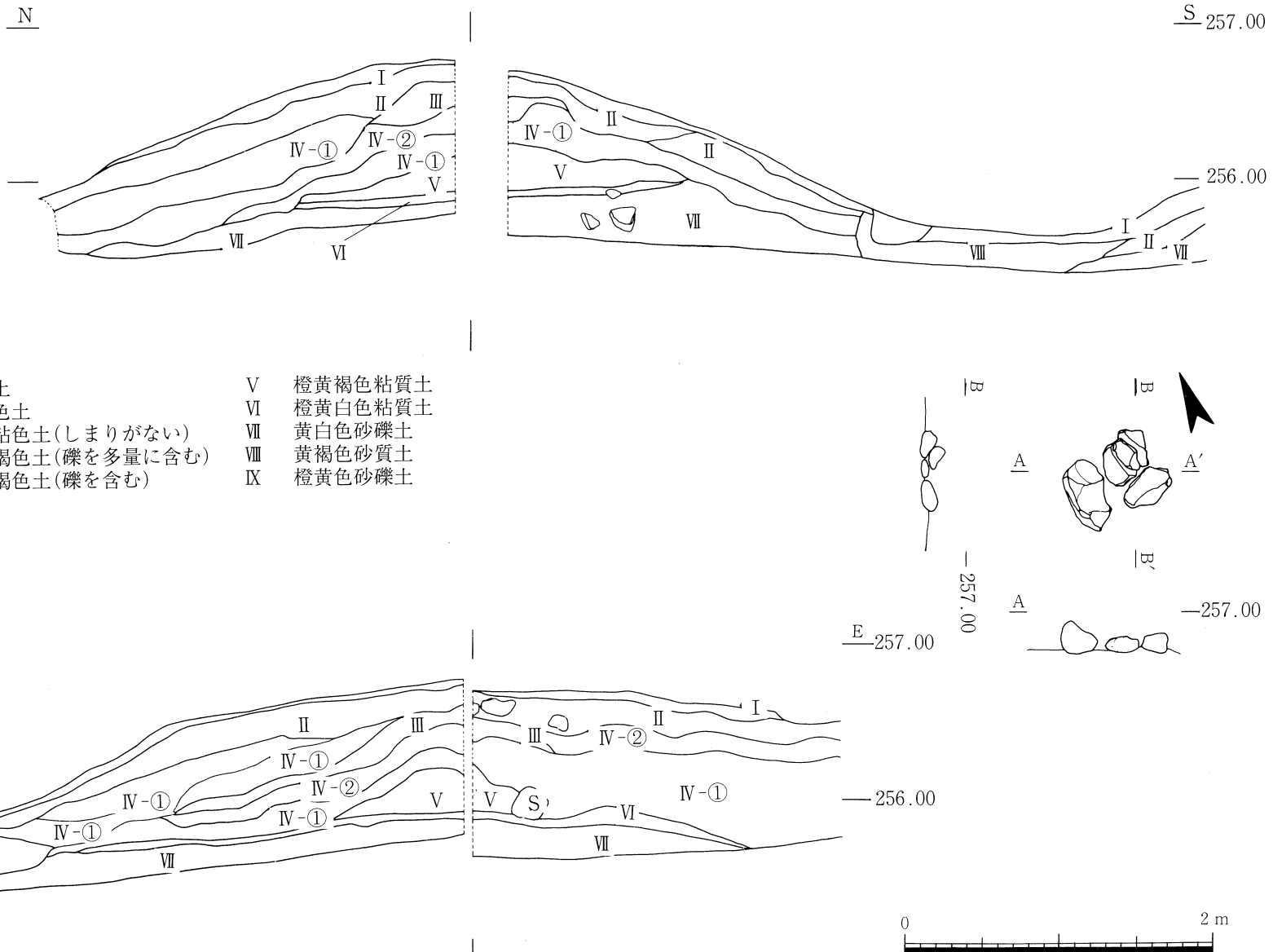
４は塚２号の７T、５・16は２Tから、９・13・15・17は塚２号南西斜面の表土排土時に出土している。



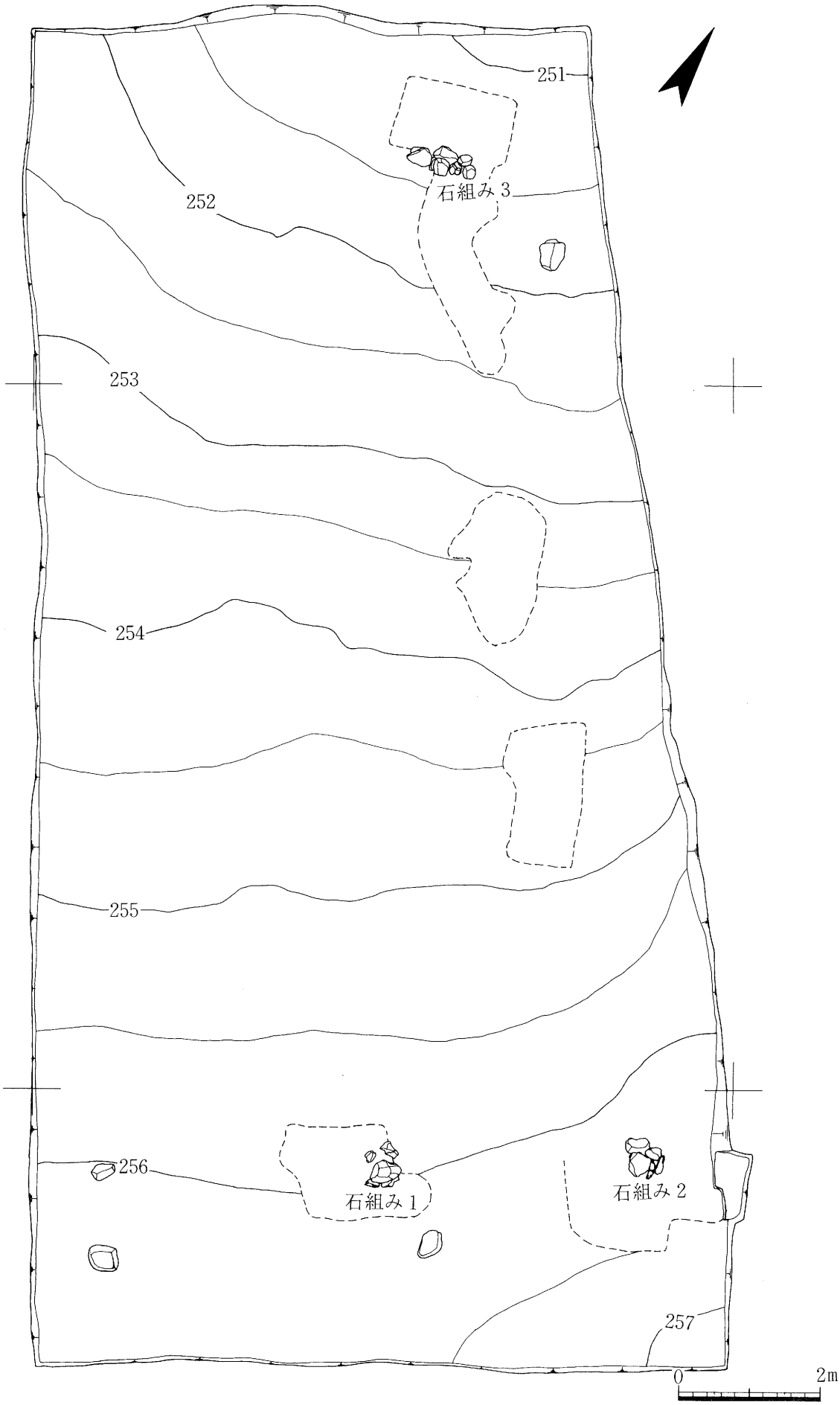

第6図　B地区遺構測量図

第7図　B地区塚2号断面図

第８図　Ｂ地区塚１号断面図・墳頂部石組み実測図




I　表　土
II　黄褐色土
III　濃黄粘色土(しまりがない)
IV-①淡黄褐色土(礫を多量に含む)
IV-②橙黄褐色土(礫を含む)
V　橙黄褐色粘質土
VI　橙黄白色粘質土
VII　黄白色砂礫土
VIII　黄褐色砂質土
IX　橙黄色砂礫土




**第 9 図　C地区遺構全体図**

## 3．C地区

**(1)立地と調査方法**（第２・９図）

C地区は、A地区の南方約80m、谷地形の標高約251～257mのやや急な斜面に位置する。この谷に沿っては山道が尾根へと続いているが、分布調査において、道の周辺に自然石を５～10個組み寄せたものが点在している事が確認された。その中には立石のものもあり、中世墓の可能性を考え、調査を行なった。試掘調査においては、特に３基の遺構を対象として周囲の表土排土を行い、平面より埋納遺構の確認を試みたが、形跡は認められなかった。本調査においては、発掘区全面の表土排土を行い、石組み遺構の記録調査の後、遺構の下部を断ち割り、断面より埋納遺物の確認調査を行った。

**(2)遺構**（第10図）

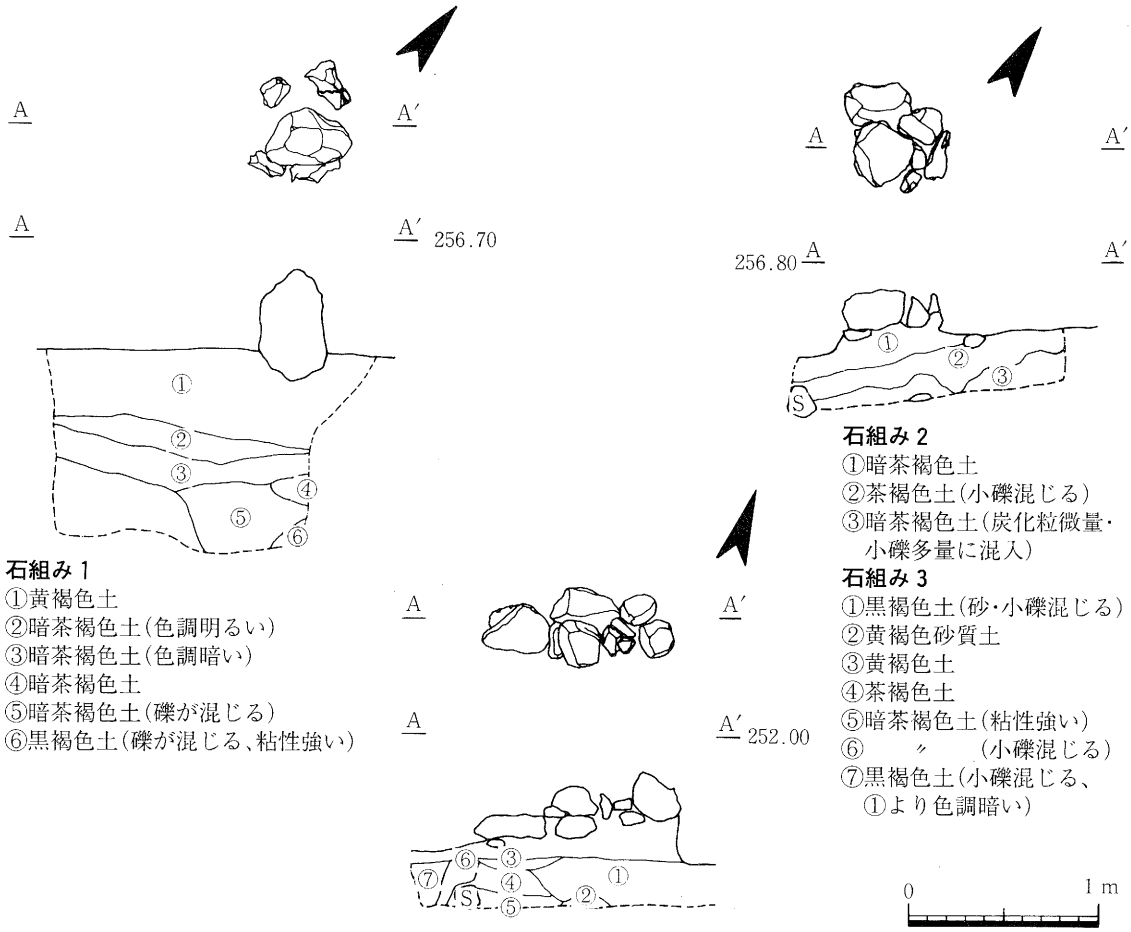
**石組み１**　長さ約60cm、最大幅約33cm、淡緑色の扁平な卵形の自然石を中心に据え、周囲に５個の石を配する。下層は、黄褐色土・暗茶褐色土・黒褐色土が、水平に堆積する。

**石組み２**　大小７個の自然石が、約50cm四方の中に組み寄せられている。下層は、暗茶褐色土・茶褐色土・暗茶褐色土の順に堆積し、最下層の暗茶褐色土層中には、微量の炭化粒が認められた。

**石組み３**　10個の自然石が、長さ約１mにわたり帯状に並ぶ。土層中には砂や小礫の堆積が見られ、発掘中には湧水があった。この遺構は、斜面下部にあたり、旧谷川河床跡の可能性が強いと考えられる。

他に、黒色土が露出している地点を３ヶ所確認し、排土を行ったが、黄褐色土層下の黒褐色土の露出と判明した。

調査の結果、石組み１・２は、地上面のみの遺構と考えられる。遺物は、遺構下部からは検出されず、表土排土時において、若干の越中瀬戸焼の破片の出土が見られたのみである。




**第10図　C地区遺構実測図**

**(3)遺物**（第12図６～８・11）

表土排土時に越中瀬戸焼が９片検出された。うち４片は石組み遺構１・２の周辺から出土している。６～８は内外面に鉄釉を施した擂鉢。６は口径26.8cm、口縁端部は玉縁状を成す。７は口径22.9cm、口縁端部は外面に稜をもち、断面は三角形をなす。内面には５本以上のオロシメを左回りに施す。８は内面に５本のオロシメを左回りに施し、底部の外面は糸切り。11は口径6.2cmの鉢で、体部内外面は橙肌色を呈する。

## ４．D地区（第２図）

A地区南西約20m、広くなった谷裾の緩斜面に位置する。一基の石組み遺構の周囲長さ19m、幅10mの範囲で表土排土を行なったが、石組みは１個の自然石が風化のために割れたものと判明した。他の遺構は何も確認されなかった。表土中より、越中瀬戸焼擂鉢約½個体分（第12図10）が検出された。口径25.6cm、内外面に鉄釉を施す。口縁端部は外側に折り返したような形状をなす。内面には11本のオロシメが左回りに施される。底部外面は糸切り。

## ５．E地区

**(1)立地と調査方法**（第１図）

E地区は、A～D地区の南方約700m、上段段丘と吉峰段丘を区切る黒谷川に沿って南東へ逆上った所に位置する。黒谷川は細い谷となり、両側の山は急斜面を成している。上流に向かって東側の急斜面を登った所の、山腹のやや広く扇状に広がった緩斜面に炭焼窯が１基構築されていた。遺存状態が非常に良く、当初は、民俗資料として現状保存する予定となっていた。しかし、９月に当事者側から当地区が盛土計画範囲に入るという通知を受け、急遽発掘調査を行うに至った。

調査方法としては、窯周囲の伐採、表土排土を行い、操業当時の形状に戻した後、平板測量、記録調査を行った。次に、窯内部の構造を確認するために、窯横断面の断ち割り、窯前面平坦部の断ち割りを行った。

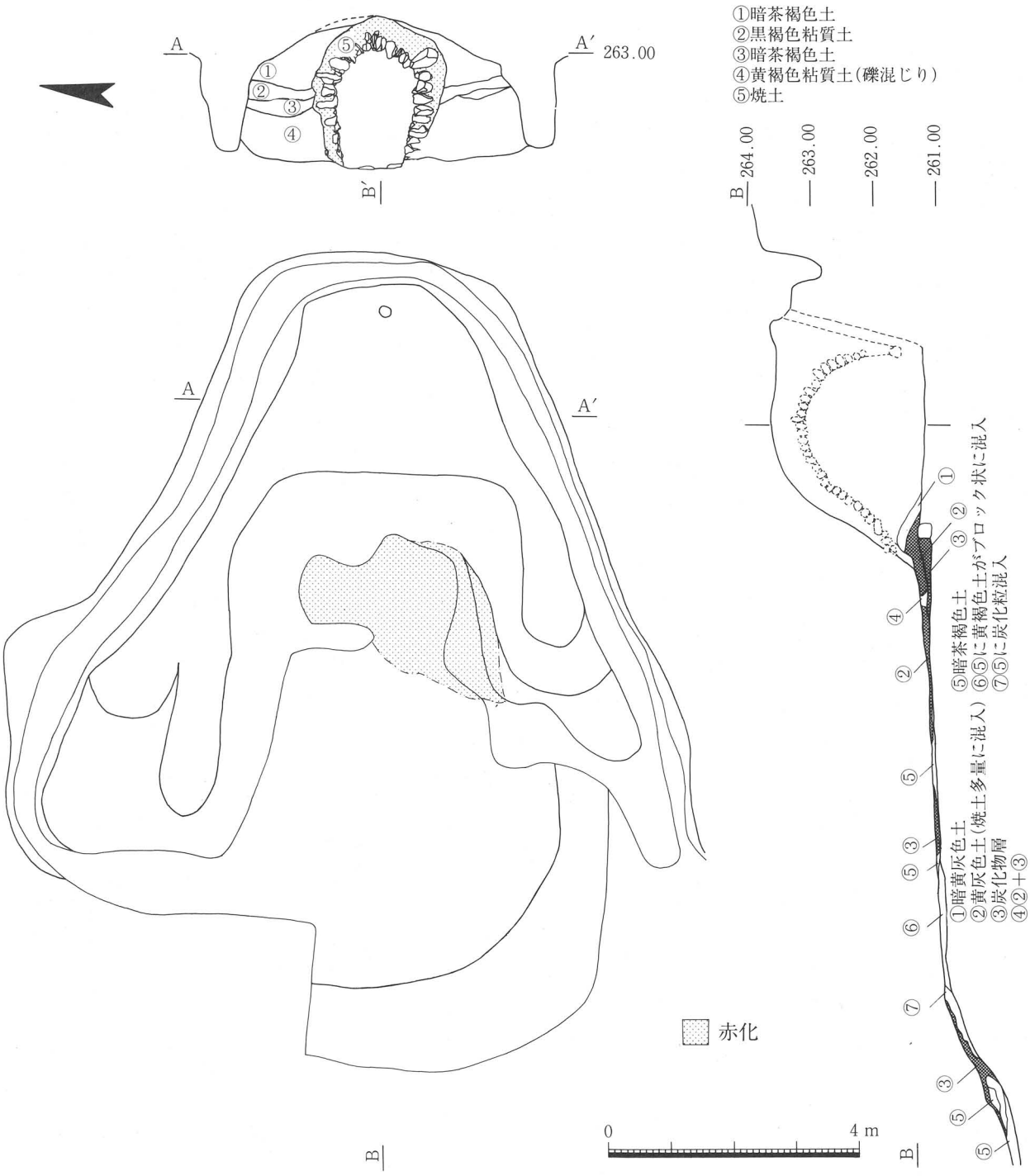
**(2)遺構**（第11図）

**炭焼窯**　窯は斜面を背に西に向かって開口する。外形は小山状をなし、平面形は馬蹄形を呈する。窯の長軸の長さは約4.2m、最大幅は約５m。主軸方向は、N-86°-Eである。窯の両袖は、窯天井部から次第に低くなりながら、北側が約５m、南側が約６mの長さで、土手状に西に向かってのびる。この土手状遺構を含む窯の周囲には、溝が巡っている。溝の上面幅は約0.5～１m、底面幅は約22～55cm、北側の溝が南に比して広い。深さは、排煙口の後部で94.5cm、窯の両側の最深部では表土から約1.3～1.6m掘り込んでいる。溝の端部では約13～26cmと浅くなり、山の斜面へと続く。この溝は、山肌を伝って雨水が窯内に侵入するのを防ぐ役割を果していたものと考えられる。土手状遺構に挟まれた窯口から約7.5mの範囲は、平坦面をなし、作業面と考えられる。平坦面西端部から山の斜面への傾斜面には炭化物の堆積が見られ、不用な炭化物の捨て場となっていたらしい。この中から、越中瀬戸焼の破片が出土した。この平坦面は、窯口から約1.5m地点で北側の土手状遺構からのびる、長さ約1.3m、幅約50cm、高さ20cmの鞍状の張り出しによって区切られる。この張り出しは、人頭大の石を基礎として、表面を粘土で固めたものであった。窯口と張り出しとの間の区間は特に炭化物の堆積が厚く、床面も赤化して強く熱を受けている。床面下層は、石を敷き並べてその上を粘土で覆い、叩きしめて排湿構造がなされてあった。この区間は、いわゆる「ねらし」が行われた場と想定できる。「ねらし」とは、炭焼きの最後の火の消し方を指す。炭は大別して「白炭」と「黒炭」があり、「ねらし」の方法が異なる。「黒炭」のねらしは、炭化が終わると窯口、排煙口を密封して冷えた後出炭するものであるが、「白炭」のねらしは、炭焼きの最終段階で大量の空気を窯内に入れて火のついた炭材を窯口から取り出し、水分を含ませた炭をかぶせて消す、窯外消火法である〔岸本　1984〕。従って、この窯は「白炭」を製炭していた窯と言えよう。窯口は、長さ約63cm、幅約35cm、上部を長さ約80cm、幅約20～35cmの石で支える。底部には長方形の石を置き、窯内部は一段高くなっている。窯壁全面は、長さ約30cm前後の石をドーム状に天井部まで積み上げ、隙間を粘土で充填する。奥壁の下部には、長さ約

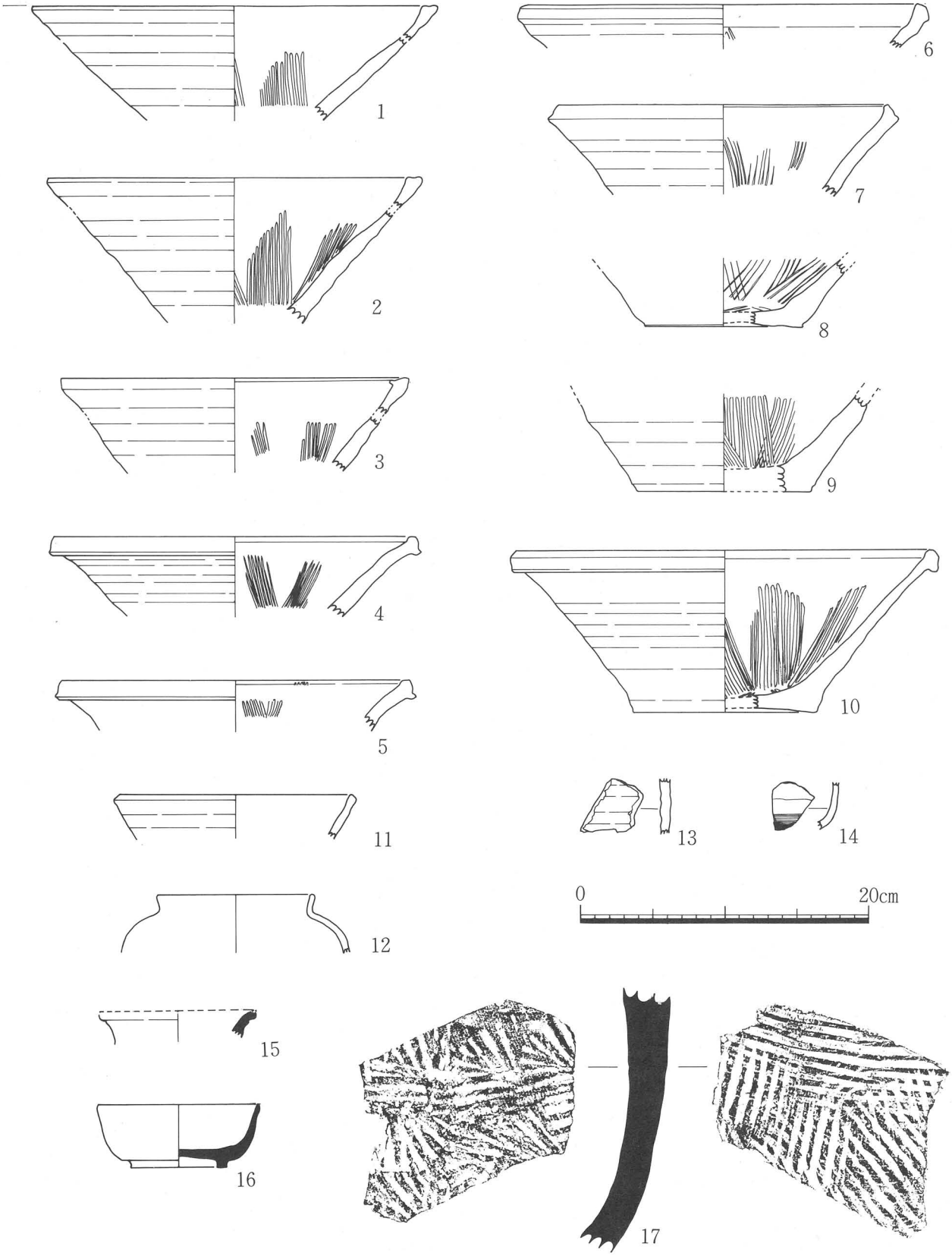
36cm、幅約12cmの長方形の穴が設けられ、窯後部の径約20cmの排煙口へと続く。排煙口周囲は赤く焼き締り、長方形の瓦片が一片埋め込まれていた。窯の構築方法としては、山の斜面を掘り込んで構築し、天井部には暗茶褐色土の盛土をして、叩きしめたものと考えられる。

**(3)遺物**（第12図12・14）

12・14は共に、作業面と考えられる平坦面から山斜面へと続く傾斜地の炭化物層の中から出土した。12は口径約11cmの越中瀬戸焼の壺で、内外面に鉄釉を施す。外面は黒色、内面は暗茶褐色を呈し、光沢を放つ。14は越中瀬戸焼の丸椀の体部小破片である。体部外面下半部は施釉されず、細い沈線が何本も巡っており、ススが付着している。内面は茶褐色を呈する鉄釉がけ。両者共、胎土は灰白色で緻密である。




**第11図　E地区炭焼窯実測図**




**第12図　遺物実測・拓影図**　1～3．A地区　4・5・9・13・15～17．B地区　6～8・11．C地区　10．D地区　12・14．E地区（17はS=1/2）

# Ⅳ　まとめ

## 1．A地区炭焼窯について

A地区では、平面形が長方形を呈し、床面中央に浅い溝をもつ形態の炭焼窯が2基検出された。平坦面に築かれ、平面形が長方形で、炭焼窯と考えられている遺構は、県内では前述の3遺跡などで検出されている。

①福光町神明原A遺跡第1号炭焼窯状遺跡　5m×2m　短辺一端に三ツ葉形の付属施設　2m×2m

②　〃　第2号炭焼窯状遺構　8m×1.2m　〃　1.5m×1.2m

③立山町白岩薮ノ上遺跡穴—30　4.25m×1.80m　短辺一端内縁に1対の小ピット、対辺に突出した窪み

④　〃　穴—24　約2.7m×約1.8m

⑤　〃　穴—09　(3.5m)×約1.3m

⑥八尾町長山遺跡第1号炭焼窯　約3.5m×約2m

⑦立山町立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群A地区炭焼窯—01　約3.5m×約1.6m

⑧　〃　炭焼窯—02　約5.4m×約2m

いずれも、レンズ状の覆土の堆積が見られ、下層に炭化物層が堆積し、内面が赤褐色に焼けている。一般に、伏焼法による炭焼窯と考えられ、形態から中・近世以降と考えられている。

炭焼の系統は、伏焼法と築窯製炭法に分けられる〔岸本　1976〕。伏焼法とは、有史以前からの炭焼法で、穴を掘って焚木を入れ、火をつける方法で、上部を土や砂で覆わない無蓋製炭法と、覆う堆積製炭法がある〔岸本　1984〕。

①～⑧を大別すると、付属施設を有するもの（①～③）、竪穴を掘っただけのもの（④～⑧）に分けられる。前者は排水構造と考えられる溝を有し、煙道や焚口の痕跡と考えられる遺構（③）、前庭部と考えられる遺構（①・②）をもち、構築に工夫が見られる。④～⑧は、方形・円形などと共に伏焼法の原初的形態と考えられ、⑦・⑧は、排水構造を有する点、発展的形態と見るべきであろうか。

県内では、炭焼窯と言えば、奈良～平安時代の呉羽・射水丘陵における地下式・半地下式の登り窯状の窖窯が著名である。中世においても同系統の窯として、大沢野町八木山大野遺跡例〔関　1984〕がある。県内では類例がないが東京都八幡山遺跡〔十菱他　1979〕では、「半地下式土窯」として、近世の炭窯が4基検出されている。

①～⑧形態と登り窯状の炭焼窯は、いわゆる並存関係にあり、後者が共同体的生業として、製品としての製炭を目的としたのに対し、前者は自給的性格が強かったのではないかと考えられる。伏焼法における炭焼窯は、多様な形態をもち、伴出遺物も少なく、年代決定は難しい。当地区の炭焼窯は、越中瀬戸焼を伴出している点で、近世以降と位置づけられよう。ここでは、近世における伏焼法による炭焼窯の一形態として挙げるにとどめる。

## 2．B地区塚について

調査の結果、塚1号は、濃黄褐色土・橙黄褐色土・淡黄褐色土を主要盛土とする、円形の土盛塚であることが判明した。構築については、地山の黄白色砂礫土をほぼ平坦にならし、橙黄白色粘質土を貼って盛土を行ったものと考えられる。外形は、自然地形を利用したり、削ったりして整えている。内部構造は検出されず、遺物も皆無で、年代、性格などは不明である。

塚2号は、濃黄褐色砂礫土・黄褐色砂礫土に赤褐色粘質土が霜降り状に混じる土を主要盛土とする、長方形の土盛塚と考えられる。自然地形を利用して、その上に盛土を行い、裾部を削って整形しているようである。若干の遺物の出土を見たが、年代・性格などは不明である。

## 3．C地区石組み遺構について

調査の結果、3基の石組み遺構は、地上面の遺構のみと判明した。地元の人の話では、山の地境を明示するために

自然石を組み寄せて目印とする風習があるという。当遺構もその可能性が強いように考えられる。

**4．E地区炭焼窯について**

県内においては、初の「石窯」の発掘例である。従来、「石窯」=「白炭窯」が一般的見方であるが、構築における「石」の存在をもって「白炭窯」を逆に規定することはできないとも言われている〔福田　1984〕。しかし、当窯は前庭部に「窯外消火」の場が存在していることから、「白炭窯」と見てよかろう。白炭窯は、一般に、高熱になるので耐火性の岩石・粘土を必要とし、炭をかき出して消火するため、かき出しやすいような巾着型が多い〔岸本　1984〕。

近世の石窯については、東京都多摩ニュータウン遺跡の発掘例をもとに、類型化が試みられている〔福田　1984〕。窯壁の構築方法、掘り方形の形状、敷石下の諸施設などを指標として分類が行われているが、当窯はいずれにもあてはまらず、天井部まで石積みを行うのはより後出的なもののようである。遺存状態も良く、前庭部裾から胎土の緻密な新しい様相の越中瀬戸焼が出土していることから、近世以降、近代の窯であろう。

**引用文献**


オ　**岡上進一　1977**　「5福光町神明原A遺跡炭焼窯状遺構」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第5次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

　**奥村吉信　1981**　「Ⅱ白岩薮ノ上遺跡5その他の遺構」『富山県埋蔵文化財緊急発掘調査概要』立山町教育委員会

キ　**岸本定吉　1976**　『炭』丸の内出版

　**1984**　「5章白炭と黒炭」『木炭の博物誌』総合科学出版

　**岸本雅敏　1979**　「5日中城跡」『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』立山町教育委員会

サ　**佐伯明夫　1977**　「武将たちの足跡　寺嶋氏と池田城」『立山町史』上巻

シ　**十菱駿武・寺田良喜・大規信次　1979**　「Ⅺ近世の遺構と遺物」『八幡山遺跡』八幡山遺跡調査団

　**定塚武敏　1974**　『越中の焼きもの』富山文庫2　巧玄出版

　**神保孝造　1987**　「2遺構E第1号炭焼窯跡」『富山県八尾町長山遺跡発掘調査概要(3)』八尾町教育委員会

タ　**立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室　1986**　『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』

セ　**関　清　1984**　「第Ⅲ章調査の概要3A地区の遺構」『富山県大沢野町八木山大野遺跡』大沢野町教育委員会

フ　**福田敏一　1984**　「Ⅳ考察」『多摩ニュータウン遺跡』昭和58年度(第2分冊)㈶東京都埋蔵文化財センター

ミ　**三鍋久雄　1977**　「立山町の地形・地質」『立山町史』上巻

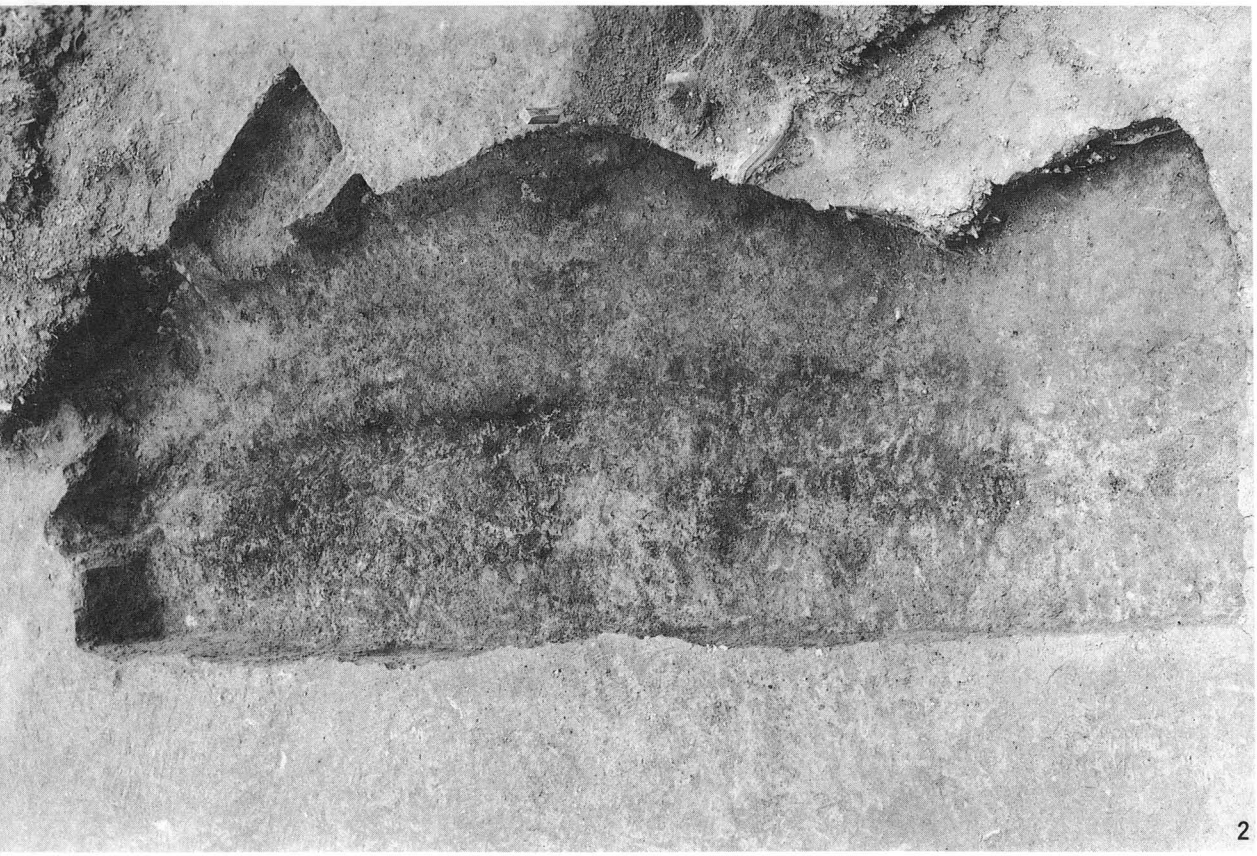
図版1
立山カントリークラブ
増設工事地内遺跡群

# 図版 2

## A地区

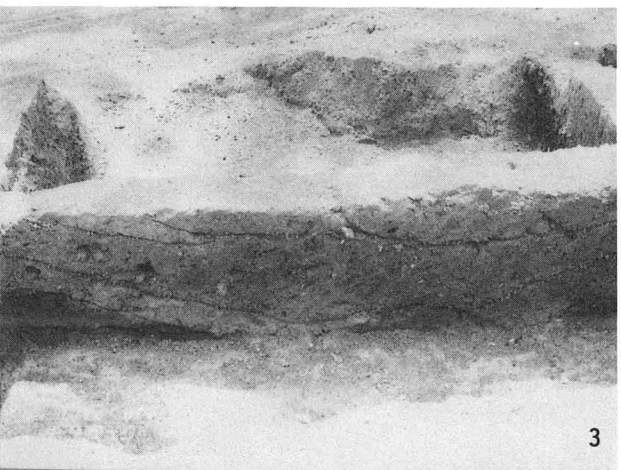
1

1．炭焼窯-01・穴-02
（南から）



2

2．炭焼窯-02
（東から）



3

4

3．炭焼窯-01覆土

4．炭焼窯-02覆土

# 図版 3

## B地区

1．塚1号全景
（南から）

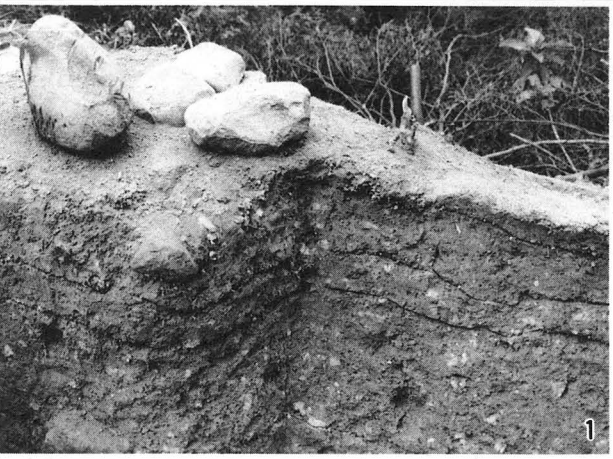
2．塚1号全景
（西から）

3．塚1号北側
盛土状況

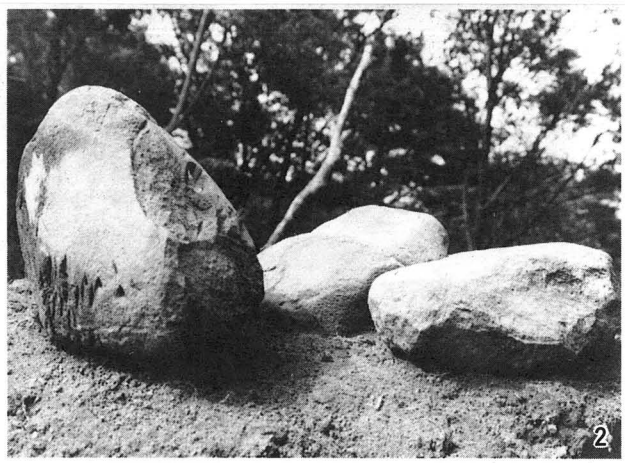
4．塚1号西側
盛土状況

# 図版 4

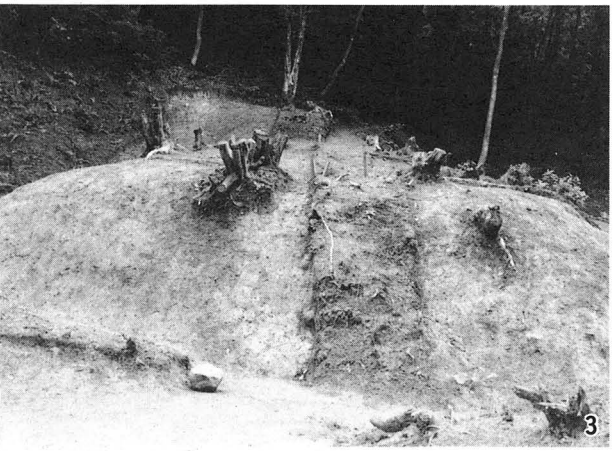
## B地区



1．塚１号東側
盛土状況



2．塚１号頂部
石組み遺構



3．塚２号（北から）

4．塚２号（東から）

5．塚２号（西から）

6．塚２号（南から）

7．塚２号全景
（北から）

# 図版5

**B地区**

1．塚2号全景
（北から）

2・4・5．塚2号
断面

3．塚2号上面
溝状遺構

6・7．作業風景

# 図版6

## C・D地区

1．C地区全景
（北から）

2．石組み1

3．石組み2

4．石組み3

5．D地区全景
（北から）

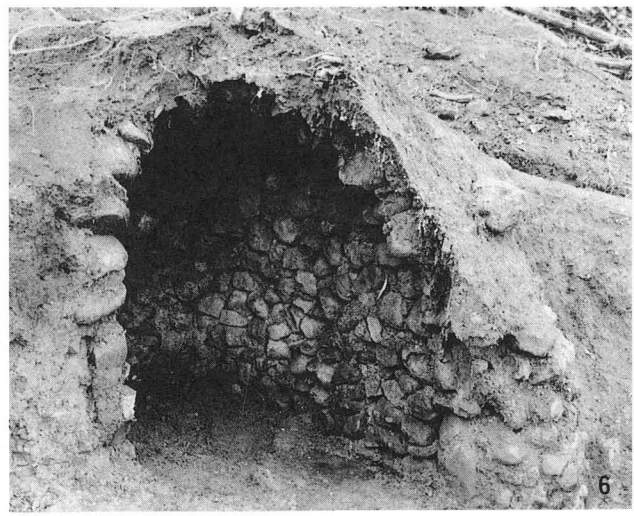
# 図版7

E地区

1～4．炭焼窯（西から

5．断ち割り

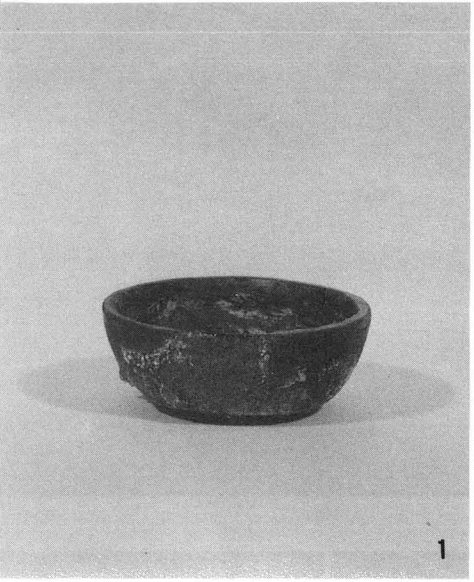
6．窯内部




7．奥壁煙出し

8．窯後方（東から）

# 図版 8

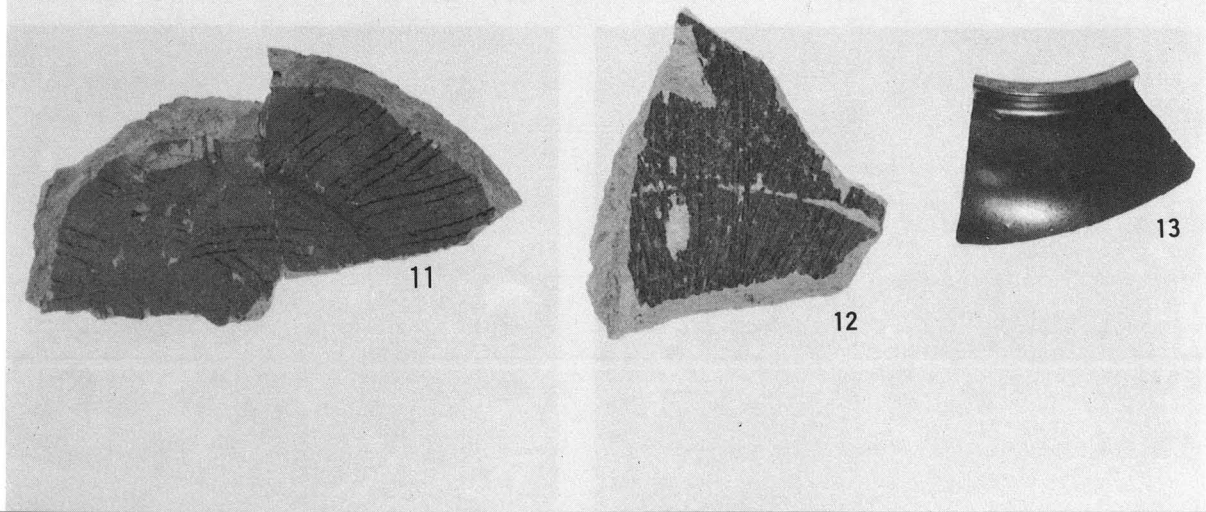


1・5・8・12.
B地区塚 2 号

2．D地区

3・4・9・11．C地区

6・7・10．A地区



13．E地区

立山カントリークラブ増設工事地内
遺跡群発掘調査概要

立山町文化財調査報告書第７冊

発　行　　昭和63年３月31日

編　集
発　行　　立山町教育委員会

印　刷　　㈲日本海印刷